

手労研のこれまでとこれから

——会誌300号発行にあたって考える——

和光中学高校 森 下 一 期

1. 何をめざしてきたか

私たちは・子どもが道具を使わなくなってきた（モノに働きかけなくなった）現実、・子どもが遊ばなくなった（貧弱になった）現実を前にしてその状況を、

望ましい発達の方が消失し、発達のゆがみが生じており、その背景には、商品化、使い捨ての消費文化がある
と分析し、

モノに働きかけ、モノを作る場を保障する取り組みが必要だととらえ、

- 道具の指導法、教材の開発

- 遊びを展開する取り組み、遊びの組織に取り組んできました。

そして、数々の教材を開発or発掘してきました。

それらを行う視点は、「遊び・手の労働のすばらしさ」を教え、伝えることでした。

競争、追い立て、押しつけ、ではなく、気づかせること（遊びも手の労働も）、であり待つことでもありました。

道具の合理的使用法の開発は、機能の発揮とそれを体感させるためのものでした。

この点に関して、私は次のようにとらえています。

遊びと手の労働の教育を掲げたこともあり、教科教育というような教科「内容」を確定化することは、「図工科」を除いて、試

みませんでした。「図工科」においても、子どもの生活、モノへの認識と働きかけの技を豊かにしていくことを目標としていたように思います。「すべての子どもに、技術および労働の世界をわからせることが、普通教育としての技術教育の役割となります」（技術教育研究会『すべての子ども・青年に技術教育を——小・中・高校を一貫した技術教育のための教育課程試案——』1995年）とは、異質なものがあつたのではないかと考えています。

そのように考えるのは、「手の労働」と規定したことにあるととらえています。つまり、現代の技術・労働からさかのぼっていったのではなく、「手の労働」そのものを問題としたということは、現代の子どもからの出発であつたのではないかとということです。単純な意味で、現代の科学・技術の基礎だから教えるべきである、と導いたわけではありません。したがって、なぜ「手の労働」を子どもたちに教えるべきか、をまさぐってきたと言えます。——少なくとも私の場合、手の労働の特徴とする「技能」の教育の大切さを「技術教育」の分野にも認識させるためにかなりのエネルギーを使いました——たとえば、次のような断片もその一つです。

・道具を使うことの意味——私は、ある時期、なぜ人はスポーツをするのかと考えたことがあります。体を動かすことに喜び——本能的な——を感じるからではないかと。では、「人」が手を使って道具を操ることはどうでしょうか。最初の初発は目的意識を持つてはじめてのではないでしょう。なぜなら、わからないときには先を見通すことさえできないはずだからです。とすると、手で何らかのモノを扱っていたら何かができ、という面白さ、喜びがあったからではないでしょうか。

だから、私は最初から目的意識があるように考えることに疑問を持ちます。人は体を動かすことに喜びを持つと同様に手で道具を扱い、対象物に働きかけることに喜びを感じると思うのです。

しかしながら、人間—子どもは道具が目の前になれば、その喜びを体験することはできません。偶然に手にした石ころから道具を創造する時間的余裕はありません。

このことは、道具を使うことの発達的な意味とは直接は関わりません。異物を使うことによって、自分の体だけではできないことをやることができることの喜びが人を「発達」させるのではないのでしょうか。

道具を功利的な意味でだけ考えたならば、非能率的な場合には捨て去られてしまいます。人間とモノとの触媒として見たときはじめて子どもの世界に位置づける「道具」となるのではないかと思います。

したがって、「技術および労働の世界をわからせる」ための基礎として道具を教える、といった発想は、とらないorとりたくないわけです。

2. これからの課題として

とは言え、手労研とて、その時々教育思潮の影響を受けないわけではありません。70年代（あるいは80年代）にあつては、系統的学習、あるいは「科学的認識」といったことも（も、であつて先に述べたことが前提にあつたととらえている）大事にされてきました。そして、それは新たな意味で大事にすべきことだと思います。その、新たな意味で、というときに、私の自覚するところでは、日本に導入された脱文脈化された「西欧近代科学」（鈴木聡によれば「制度化された科学」『学校Ⅰ』）ではなく、自分たちの生活の文脈につながるところでの「科学的認識」ではないかと考えています。

これは、ある意味では方法論の問題であるように思います（ここでいう方法論とは、広く教育の内容を選択するといったレベルのものです）。教育の内容が子ども自身＝生活と切り離れたところで選出されるとしたならば、どのように善意であろうと、子どもにとっては彼の生活の文脈は切断されているということです。（このように言うとき、日本のこの地域に根ざした人間として——同時に地球的な視野を持って——育つことが、これからの社会に生きて行くには大切であると考えています）

したがって、子どもの現実、生活の文脈と絡み合わせながら選択されなければならないのではないのでしょうか。仮に、「普遍的な科学」から導き出されたとしても、子どもが自らの生活の文脈と自覚的に切り結ぶ場が設けられなければならないと思います。ただし、生活の文脈とは、個の生活をのみ意味しているわけではありません。他と切

り離された生活に追いやられている現代の子どもたちに、周辺の生活に関与し広げていく場を設けることは極めて重要です。ちなみに、取り組みにおもしろさ、楽しさを感じずることもここでの「文脈にある」と考えています。なお、現実の子どもたちの多くは、道具から切り離され、様々なメディア、情報の中におかれています。その「生活の文脈」も全否定するべきではないでしょう。他の生活を知らせ、経験させる中で、自ら浸かっている生活を対象化できるようめざす必要があります。

このように考えたときに、子ども自身は何を求めるか、といった視点を入れることが極めて重要であり、有効であると考えます。そこには、様々なレベルがあることをおさえる必要があります。このように言う、「子どものやりたいものだけやらせるのか」と極論されますが、子どもの選択にまかせるもの、ある範囲で子どもに選択させ

るもの、提起した課題の諾否を求めるもの、課題の一部分に子どもの発想を入れるもの、……。もっと多様にあるかも知れませんが、その時の課題により、しわける必要があります。さらに、ここでは、子どもが個で行うことだけを想定するのではなく、子どもたちが相互に関わり合いながら取り組むことが考えられなければなりません。私は、現代における学校づくりにおいて、「参加と共同」が最も重要な争点となっていると考えているのですが、それと共通する捉え方があるわけです。

こういった意味で、遊びと手の労働の教育は、若干のふれはあったかも知れませんが、一貫して、子どもの生活の「文脈」を大事にして進めてきたし、今後もその方向を発展させて行く必要があると考えています。同時に、このような視点での整理もして行かなくてはならないのではないかと思います。

編集後記

現在、都や区は、制度改変にむけ動き出し、現場では様々な問題でゆれはじめている（都は、学童保育運営要綱を改変）。そんな中、学童保育・児童館のお2人から、放課後の子どもたちについての報告

をしていただいた。冬の合宿の報告、前号の障害児の報告との関係で、小学校からみた子どもの様子が入れられなかった。

今月よりスタートした、山中さんの「二十騎町だより」。これからが楽しみです。

（千葉）